法・制度などだけでは、支えきれない側面がある

先月半ば、立川市で発達障害のある息子（４才）を母親（３５才）が絞殺したとの報道があった。

６才の娘もいる４人家族であり、母親は、行政（市）の窓口に相談したり、発達につまずきのある子どもや母親を支援する民間団体の学習会にも顔を出し、「子供の障害を受け入れられない」、「辛いと思う自分が嫌だ」、「パパが話を聞いてくれるからいいけど」、「明るい、前向きなお母さんになりたい」と話していたという。

また、息子は保育所に通い、部屋を飛び出すなどの落ち着きのない時もあったが、お菓子を友達にあげたり、話せる言葉が増えてきていたようで、母親は保育士の話に頷きながら聴き入る様子も見られたという。

娘の育児経験もあり、しかも関係機関・者と繋がりのあった母親であっても、我が子を殺害した今回の報道に接し、障害のある子どもや親を支える支援の法制度や社会的資源の充実は当然であるが、それでも究極的には支えきれない側面があると推測している自分だけに、「やはり…」とつい思った。
つまり、当 HP で「障害児支援は、親（主に母親）支援である」と発信し続けているが、日常育児する時間が最も多い母親が、障害のある我が子を受容する考え方や姿勢が育まれていかないと、今回のような事件が起こりうるということ。

この母親に係わった関係者は、それぞれそれなりに誠心誠意対応したと思う。
それだけに、関係者の話を聞いて前向きになる母親とどうしても前向きになれず自らを追い詰める母親との違いは、恐らく紙一重だろうがその違いの分かれ道となるものは、いったい何なのだろうかという問題が残る。

「十人十色、人それぞれ」という言葉もあるが、生命に関することにまでこの言葉を波及させてしまうと「色んな考え方をする親はいるもので、親によっては、殺される子どもがいても仕方ない」ということになりかねない。
「親に殺されたくない！生きたい！」と願う子どもの人権の究極である生存権を守ることこそ、社会の責務、大人の責務でないだろうか。

人は一人で生きて行けないだけに、「生きるとは、あえて比べず、互いに輔け合って、生きるとはどういうことかを自らに問い続ける活動」であることを、大人になる前から、親になる前から、若者たちが生きようとする一人の人間として思考・思索し続けることを切に願う。

阿部幸泰　　（2011 年 2 月 11 日　記）